

### 3. 交響曲第9番『新世界から』ホ短調 作品95(ドヴォルザーク)

ドヴォルザーク(Antonín Leopold Dvořák: 1841 ~ 1904)は、チェコ国民学派を代表する作曲家である。交響曲第9番『新世界から』は、日本では、ベートーヴェンの運命交響曲、シューベルトの未完成交響曲とともに『3大交響曲』として親しまれており、近年では年明けの時期に演奏会で取り上げるプロフェッショナル・オーケストラも多くなってきている。



Antonín Leopold Dvořák

1884年、ロンドン・フィルハーモニー協会の招きでイギリスを訪問し、そこで披露した作品が熱烈な歓迎を受けたことで国際的な名声を確立したドヴォルザークは、1892年に、ニューヨークの音楽院の招きに応じて渡米した。この新世界交響曲はその翌年(1893年)に作曲され、あのカーネギー・ホールで初演された。そのためか、この作品にはアメリカ音楽、特に黒人霊歌に影響を受けたことがうかがわれる部分が随所にある。

2年半におよぶ音楽院院長としての滞在中には、この交響曲のほか、弦楽四重奏曲「アメリカ」やチェロ協奏曲(ロ短調)など、ドヴォルザークのもっとも重要な作品が作曲されている。

#### 第1楽章 Adagio — Allegro molto ホ短調 4分の2拍子

序奏部は、郷愁を感じさせるチェロの旋律で開始される。時折、郷愁を打ち消すような強奏や第一主題の暗示が現れるが、ティンパニの連打、ヴァイオリンのトレモロ(同じ音を細かく早く刻む奏法)に導かれて曲はソナタ形式の提示部に移行する。

ホルン(後半は木管楽器)で奏でられる第一主題(ホ短調)は、第二主題の律動(リズム)の基となったり、他の楽章でも度々再奏されるなど、最も重要な主題である。



以下、この解説では、この重要な主題を「新世界主題」と称する。

新たな主題(ト長調)を持った経過句ののちに現れるフルートによる第二主題(ト長調)は、黒人霊歌(“Swing low, sweet chariot”)にインスピレーションを受けたとされており、「新世界主題」の始めの2小節と終わりの2小節の律動を用いて表現されている。



#### 第2楽章 Largo 変二長調 4分の4拍子

聖歌のような序奏に続いて、複合3部形式の主部に移行し、主題がコール・アングレによって演奏される。この旋律を聞いて帰宅したくなるのは、日本人だけなのだろうか。



ホルンが懐かしむように主題のモチーフ(主題を構成する最小単位(たとえば第1小節目)の音の並び)を連呼すると、曲は2つの主題を持った中間部に移行する。



この中間部の調性は「嬰ハ短調」となっており、主部の「変ニ長調」とは“異名同音の同主調”という関係である(「嬰ハ」と「変ニ」はピアノの鍵盤上では同じ場所)。

さらに同主調(嬰ハ長調)に転じた遷移部では、強奏となったときに、トロンボーンが「新世界主題」を、ホルンとヴァイオリンが第一楽章の第二主題を、そしてトランペットがこの楽章の主部主題を同時に出現させることで、郷愁に駆られながらもアメリカでの刺激を楽しむような心強さが表現されているように思える。その後、小人数の弦楽器のアンサンブルが現れる主部再現部を迎える。



『新世界から』の自筆譜  
チェコ語“Z nového světa”と英訳“From the new world”  
下部にドヴォルザークの署名がある

### 第3楽章 Scherzo, Molto vivace ホ短調 4分の3拍子

主題を暗示する序奏に続く複合3部形式の主部では先ず、第一主題(ホ短調)が木管楽器によって演奏される。



経過句を経て現れる第二主題は、ホ長調(同主調)となっている。



その後、第一主題が再現され、弦楽器が高音部から順番にその動機を受け渡すことで始まる遷移部ではチェロ(のちにヴィオラ)に「新世界主題」が現れる。

中間部はハ長調になっており、舞曲風である。



#### 第4楽章 Allegro con fuoco ホ短調 4分の4拍子

S. スピルバーグ監督の映画「ジョーズ(JAWS)」のテーマのような序奏に続いてソナタ形式の提示部に移行すると、ホルンとトランペットが勇ましくも朗々とした第一主題(ホ短調)を演奏する。



一方、クラリネットで奏でられる第二主題(ト長調)は、どこか郷愁を感じさせる。



実際、その“合いの手”としてチェロに現れる音形(譜例A)は、ボヘミアの田園風景を描写したような交響曲第8番(ト長調)の第一楽章第一主題(譜例B)を連想させる。



その後、ヴィオラ、チェロそしてコントラバスに受け渡されるピッチカートに導かれて曲は展開部に入るが、その展開部のみならず、再現部、さらには終結部(コーダ)において、各楽章の主題が次々と、時には同時に現れ、壮大なクライマックスを迎える。そして、心を落ち着かせるように静かに曲を閉じる。

『新世界から』は、“Z nového světa”として作曲者自身が付けたタイトルであるが、“From the new world”と英訳併記されている。ここでいう「new world(新世界)」とは赴任先のアメリカのことである。そこから想像するに、この交響曲は、郷愁に駆られたドヴォルザークが作曲した、チェコに向けた“アメリカからの音楽の便り”という位置づけなのであろう(昭和の話で恐縮だが、「カナダからの手紙」は“Love letter from Canada”である)。



19世紀ニューヨーク市の高架鉄道(左図)

熱心な鉄道ファンだったドヴォルザークは、最新の蒸気機関車を見るべく、グランド・セントラル駅(右図)に毎日足を運んでいた